

称号及び氏名 博士（学術）呉 桂友

学位授与の日付 平成 17 年 3 月 31 日

論文名 「和辻倫理学における「人間」観の研究
——「個人」の問題を中心に——

論文審査委員 主査 山口 義久教授
副査 平木 康平教授
副査 森岡 正博教授

論文要旨

1 小論の研究視点

「人間とは何か」、「人間はいかに生きるべきか」という問題は、哲学上の永遠の問題である。古来、人間は多様な自己理解を試みてきた。たとえば個人主義的な人間観や社会科学的な人間観などのようなさまざまな人間観ができた。しかし、それらは必ずしも人間を十分に捉えているとはいえない。近世に現れた個人主義的な人間観は人間の置かれた社会的・歴史的状況を捨象あるいは不当に形式化し、人間をただ個人として、抽象的個体として取り扱う。自然科学的方法を人間に適用した社会科学的な人間観は、人間生活の現象的事実をただ実証的に記述するのみで、人間が人格として有している個性を捨象してしまっている。そのゆえに、我々は全体的で且つ具体的な人間、つまり社会的存在であると同時に個人であるような現実的な人間を把握することが必要になる。また、我々が現におかれている時代は、核兵器の開発以来、人類絶滅の危機が続き、生産の飛躍的増大とともに、公害と環境破壊も著しくなってきたような人間疎外の時代である。そのゆえに、現代にこそ我々は、改めて「人間とは何か」、「人

間はいかに生きるべきか」という問題を真剣に取り上げなければならない。

小論の研究対象である和辻哲郎の倫理思想は、まさにこのような問題に適切な答えを提供するものである。彼は「人間として生きるとはどういうことか」という問いを中心に据えて、それを倫理・宗教・歴史・芸術などのさまざまな面から思索し、何よりもまず現実的で具体的・歴史的な人間を問題とするように心がけた。こうした彼の思索の精髓ともいえるべき著作が『人間の学としての倫理学』と『倫理学』である。小論の目的は、彼が主にこの両書において、「人間」とはいかなる存在であり、またいかに存在すべきであると考えたかを考察することにある。

以上の目的を果たすために、小論がとった方法は、何よりもまず和辻に即して彼の基本思想を明らかにするやり方である。そこでは、特に誤解されやすいものを取り上げて分析して、和辻の真意を確かめるようにつとめる。なお、和辻の論理は「図式化の論理」と呼ばれるから、和辻の基本思想を明らかにする時に、できるだけ図式化して述べる。そして、それをベースにして、その思想に関する批判を取り上げて検討し、問題点についても考察した。

2 小論の構成と各章の概要

小論は、第一章「『人間』とはなにか」、第二章「『人間存在』の構造について」、第三章「和辻の『人間』観における『個人』の問題について」という三章から構成されており、その全体を通して、和辻が「人間」（「人間存在」）をどのように理解していたかという問題を中心にして論を展開していった。以下、具体的にそれぞれの章について概要を述べる。

第一章「『人間』とはなにか」における主題は、和辻倫理学において「人間」と「存在」という概念が語義的にいかなる意味をもつかを考察することにあつた。そ

れを明らかにするために、まず、和辻が「人間」を考察する基礎を確認した。

そこで、「人間」考察の主題について、彼の人間に対する関心はそれを動物の一員として取り扱うことになく、それを「実践的主体」として捉えること、従ってまた人間を人と人との連関から捉えることにあることを明かにした。そのゆえに、彼が「生物学上の分類の概念として」の人間を主題とせず、「規範的ないし価値的な」つまり倫理性を持つ人間を主題とすることを示した。「人間」考察の出発点について、「人間」を把握するに際して、彼が自明と思われる自我意識から出発することを否定して、それより一層根本的な人間存在の「歴史的社会的なる事実」あるいは「日常事実」から出発する方法を取っていることを確認した。

次に、和辻における「人間」と「存在」の概念の意味合いを明らかにした。彼によれば、「人間」という日本語は「『世の中』自身であるとともにまた世の中における『人』」を意味し、また「存在」とは「間柄としての主体の自己把持、すなわち人間が己自身をもつこと」を意味する。そして、この両概念について検討した。

「人間」概念の検討について、「人間」は確かに「間柄」的に捉えられなければならないが、それが非-人的に捉えられることを「人間」に対する一つの誤解として否定して、「人間」はあくまでも人でなければならないことを確認した。また、「人間」という言葉が日本語独特のものであることを論じて、和辻倫理学がそれに依拠したものであるとしても、その「人間」観は普遍的な人間に対して意義があるかという問題を取り上げた。そこでは、言葉として捉えられる人間と概念として捉えられる人間との区別を通じて、彼の言語観、特殊と一般との関係から考えた結果、彼の「人間」観は一つの普遍的な人間観として意義があることを述べた。「存在」概念の検討について、「存在」という言葉は「ある」として考えられる存在という言葉と区別され、それより人間的に限定されるものであることを示した。それによって、「人間」観は自然的な人間観というより

人間を中心とする人間観であり、**Sein** を扱う有論だけからでも、またカント的な個人の主観的な当為意識の **Sollen** だけからでも十分に扱うことができず、存在と当為という両面から統一的に捉えられるものでなければならぬことを確認した。最後に、レーヴィットの〈人間〉〈間柄〉との比較において、和辻と同じように人間を共同的なもの、間柄的存在と考える彼の〈人間〉(**Mitmenschen**)や〈間柄〉(**Verhältnis**)の概念と比較することによって、和辻の「人間」、「間柄」概念を一層明らかにした。その結果、両者はいずれも人間を孤立的存在ではなく、間柄的存在として捉えるとはいえ、和辻が人と人との関係(間柄)に重点を置くのに対して、レーヴィットはどちらかと言えば関係項である人の方に重点を置く、ということを示した。

第二章「『人間存在』の構造について」における主題は、「人間存在」の個人性と全体性との相互否定的構造と時間性空間性の構造を明らかにすることにあつた。具体的にはまず、「人間存在」の相互否定的構造において、なぜ個人とせず個人的契機とし、全体とせず全体的契機とするのか、またその両契機の根本にある「空」がどのように考えられるべきかを考察した後、「人間存在」の否定的構造、言い換えれば、個人性と全体性との相互否定的関係を明らかにした。次いで、この和辻の基本的な考えに基づいて、和辻の「人間」観を個人軽視全体重視の立場とする批判者の所説をいくつか取り上げ、それぞれの批判についてその根拠と妥当性の検討を行なつて、そのような問題点は和辻の「人間観」には含まれていないことを論じた。また、この批判との関連において、和辻の「空」観について、指摘される問題をただした上で、彼は「空」の真意を捉えていながら、そこから逸脱する問題があることをも明らかにした。次に「人間存在」の空間性と時間性において、「人間存在」の「空間性」とは物理的自然における一様なひろがりとしての空間ではなく、「主体のひろがり」として「主体的なる人間の『間

柄』そのもの」であること、また「人間存在」の「時間性」も「人間の対立的統一の運動」であること、また、このような主体的な空間性と時間性は、「人間存在」においては相即しているもの、相離れないものであるが、「人間存在」の構造を静的に見れば空間性となり、動的に見れば時間性となることを明らかにした。そして、「人間存在」の空間性と時間性について検討を行った。空間性については、和辻は対象化された自己にあまり注意を払っていないがゆえに、ただ対象化された汝だけを最初の契機として物を捉え、自分、とくに自分の身体の、契機としての重要性を軽視したという問題点を指摘した。時間性については、「人間存在」の「間柄」を「あらかじめすでに」から捉えることは彼の強調する「日常性」とギャップがあることを指摘した。また、彼の「人間存在」の空間性と時間性との相即において、和辻は時間性より空間性の方を第一義的なものとしているという誤解を正した。

第三章「和辻の『人間』観における『個人』の問題」における主題は、和辻はいかに「個人」を考えるかということであった。そこでは、まず、「個人」の「存在性」は、「人間」が根本的・第一次的な存在であるのに対して、派生的・第二次的なものであることを明らかにし、「個人性」は個体として見られる個人の個別的な個性ではなく、全と相互転換できる「異」性であることを明らかにした。次に、そのような「個人」の考え方について検討した。そこでは、まず、「個人」の捉え方について述べた。「個人」は個人（＝人間）、「人間」、個体として見られる個人という三つの概念との関係を明らかにして、それに「人間存在」における意義があることを指摘した上で、それがいかなる呼び名で呼ばれるべきかの問題を考えた。さらに、「人間」をめぐる個人の実現、自由、唯一性の問題が、和辻においていかに考えられているかを示した。次に「個人」に関する問題を述べた。そこでは前章に引き続き、個人軽視全体重視の問題に関する批

判者の所説のうち、主に個人的契機に関する批判についてその根拠と妥当性の検討を行って、和辻の「人間」観にそのような問題点はないことを明らかにした。さらに、彼の「人間」観においては、「個人」の身体について、それを間－客体的なものとして十分に捉えていないこと、その呼び名としての「自我」の捉え方について、思想的な混乱があること、という二つの問題点を指摘した。

審査結果の要旨

本論文の研究対象である和辻哲郎は、芸術論や仏教思想の考察などを踏まえて独特の人間学的・倫理的考察を行なった哲学者である。彼の倫理思想は、人間を独立した個人としての側面からのみ捉えようとする西洋近代の人間観の一面性を批判しつつ、倫理を人と人との関係性の中で捉えようとするところにその特色と独自の意義がある。しかし、彼の論述が必ずしも誰にでも明瞭であるようなかたちで展開されているとは言えないことと、彼の思想が保守的傾向をもっているという全体的な印象とが相まって、これまでさまざまな批判も受けてきた。この論文は、和辻の倫理学を支える人間観を丹念に読み説くことによって、そのような批判のもとにある誤解あるいは理解不足を正し、和辻の人間観の意義を明らかにしようとするところにその全体的な特色がある。以下に、本論文の内容に沿って、その特色を述べる。

本論文は、第一章において、「人間」と「存在」という概念が和辻倫理学においていかなる語義的な意味をあたえられているかの考察から始められる。彼の「人間」把握は、ほかの人には自明の出発点と思われるような自我意識から出発することを拒否して、人間存在の「歴史的社会的なる事実」あるいは「日常事実」と彼が見なすものをより根本的と考え、そこから出発していることが指摘される。和辻によれば、「人間」という日本語は「世の中」そのものであるとともにまた世の中における「人」を意味し、また「存在」とは「間柄としての主体の自己把持」を意味するということが示されたうえで、個人としての「人間」と、人間の「間」「仲」の面とは、いずれが先行するわけでもないから、「人間」を「間柄」という観点だけから捉えるのは、和辻の「人間」観に対する誤解となるということが注意される。また、和辻の立場では、実践的主体としての人間に対しては主観客観の対立関係を適用することはできないということから、本論文は和辻の言う「人間」を、「間主観」的にとらえられた主体からも区別して、歴史的・社会的な存在であると同時に、他人との連関をも考えなければならない主体と規定し、間一主体という呼び名をあたえている。このように、本論文は和辻の概念を的確に理解しようとするだけでなく、論者自身の視点に立脚しながら整理把握するものであることが見てとられる。

次に「存在」概念の検討においては、和辻の「存在」概念が自然的な存在にとどまらず、人間の行為的な連関に限定されていることに注目して、その概念が存在論と当為論の両面から統一的に捉えられなければならないものであることを指摘する。そして第一章の最後では、このような和辻の人間観を、同様に関係性の側面から人間を捉えたレーヴィットと比較することによって、和辻の「人間」概念の特徴をさらに一層明らかにしようとする。両者はいずれも、人間をアトム的な独立し

た存在ではなく、間柄的な存在としてとらえてはいるが、和辻が人と人との関係(間柄)に重点を置くのに対して、レーヴィットはどちらかと言えば、関係項である人(個人)の方に重点を置いていると結論づけられる。

第二章においては、「人間存在」の否定的構造すなわち個人性と全体性の相互否定的関係と、「人間存在」における時間性・空間性の構造が明らかにされる。和辻において出発点とされる事実とは、人間が(和辻が「全体性」と呼ぶ)関係性の中で生きているということであり、人間の個人性は、その全体性を捨象(否定)することによって出てくる、ある種抽象的な側面である。したがって、この個人性はそのままにとどまることはできず、新たな全体性へと否定的に解消されなければならない。このように「人間存在」は、個人性・個性性と全体性・関係性が相互に否定しあう、弁証法的な運動において捉えられている。これが「人間存在」の否定的構造であり、その否定性を支えているのが「空」である。本論文の特徴は、このような和辻の基本的な考えに基づいて、彼の「人間」観が個人軽視・全体重視の立場であるとする批判者の所説をいくつか取り上げ、それぞれの根拠と妥当性の検討を行なって、そのような問題は、和辻の「人間」観には当てはまらないと論じるところにも、つまり批判者への逆批判にも見ることができる。また、この批判との関連において、和辻が「空」を状態や、実体、あるいは客体として見ていたという批判に対して、和辻は「空」を「動性そのもの」と考えており、「空」の真意は捉えていると反論する。それと同時に、和辻が「空」を「自己還帰」する「絶対的全体性」と表現したことは、「空」の本来の意味から逸脱しかねない規定であることも指摘している。

次に、和辻における「人間存在」の空間性と時間性について、共同性(全体性)の否定によって成り立つ個人が共同的な面をもつ多数の個人であること、それら多数の個人は客体的であるだけでなく、主体的なひろがりとしても捉えられることを明らかにする。すなわち、空間性や時間性は、物理的な自然や時間のように人間が単にその中に客観的に置かれているものではなく、むしろ主体的な人間存在の場面において見いだされてくるものであって、「人間存在」の構造を静的に見れば空間性となり、動的に見れば時間性となる。こうして、空間性における空間は生きられる空間になり、時間性における時間は生きられる時間になる。本論文は、このように和辻の見方を整理しながら、そこに含まれる問題点をも指摘する。すなわち、空間性については、和辻はただ対象化された「汝」だけを、ものをとらえる契機としていて、自分、とくに自分の身体の、契機としての重要性を軽視したという問題を提起し、時間性については、和辻の見方は新しい人間関係や古い人間関係を破り捨てることができるが、可能的な間柄を制限してしまうおそれがないとは言えないという問題点を指摘する。他方、和辻は時間性より空間性の方を第一義的なものとしているという誤解に対しては、実際には彼は時間性と空間性とが相依的であると

考えているのだということの根拠を示している。

第三章では、和辻における「個人」の存在性は、「人間」が根本的・一次的であるのに対して派生的・二次的なものであり、「個人性」は個別的な個性ではなく、「同」性としての全体性と相互転換できる「異」性であるという基本理解に基づいて、和辻の「個人」の考え方について検討を加えている。そこでは、広い意味での人間と、和辻の考える「人間」、連関的な個人という三つの概念との比較を通じて、和辻の考える「個人」の意義を明らかにしている。今の場合に限らず、このような概念の整理に図式を活用するのも、本論文の特徴の一つである。

この章では、和辻の見方を個人軽視全体重視とする批判者の所説のうち、主に個人的契機に関する批判に対して、和辻は個人の面から考えられる面をまったく否定して情念や死や宗教などを非・個人的なものとしたわけではないことを示すことで答える。その一方で、和辻の人間観においては、「個人」の身体が自然物理的なものと区別されるような、他人との連関の中にある客体（本論文では「間－客体的なもの」という表現があたえられる）として十分に捉えられていないと指摘する。また、「個人」を指すのに用いられる「自我」概念は、西洋と東洋とで異なった系譜をもつにも関わらず、和辻は「自我」のこの二つの系譜をあまり区別しないために概念的な混乱が起こっているのではないかという問題も指摘している。

本委員会は、この論文がどれだけ学術的な研究としての水準と独自性を実現しているかという観点から評価を行なった。まず和辻の著書の読解という点に関しては、十分な理解を示しているだけでなく、和辻の言葉だけからでは必ずしも明らかではないところも、概念的な整理を工夫しながら読み説いている。その論述の中で図式を用いて説明することによって、和辻の論旨を明らかにしようとしていることも、その独自性の一つである。また論文の構成力という点でも、和辻の人間観を全体的に明らかにするためのポイントが的確に押さえられた構成になっている。他方、和辻の批判者に対する反論にも一定の説得力が認められるし、和辻に対しても一方的にその思想を祖述するにとどまらず、論者自身の視点から、不十分な点や問題点をしている。そのように、研究対象に対する理解力と、論文を構成するための論理性・構成力という二つの面で、本論文は一定の水準を達成しており、先行研究と研究対象そのものに対する批判的な視点には独自性が現われていると評価することができる。もちろん、和辻倫理学の意義を十分に明らかにするためには、論者自身が論文の結尾で言及しているように、いくつかの課題が残されている。しかし、論者がそのような課題に取り組むための力量と基礎的知識を有していることを、この論文は実証していると言えるであろう。

最終試験結果の要旨

本論文は、和辻哲郎の倫理学の基礎にある人間観の独自の意義を、和辻自身の論述に即して明らかにし、そのことを通じて、和辻倫理学に対するある種の批判にも有効な反論を提出するものである。本審査委員会は、本論文を、研究対象である和辻倫理学に対する理解力、また先行研究に対する独自性、さらに議論の論理性と論文の構成力といった観点から総合的に評価した結果、それらの点のいずれにおいても、評価に値する意欲的な論文であると認めた。よって本審査委員会は全員一致して、本論文が博士（学術）の学位を授与するに十分なものであると判断するものである。